

戦後における読書行動と社会階層をめぐる試論的考察

—— 格差の実態の変容／格差へのまなざしの変容 ——

久井 英 輔*

A Tentative Study about Reading and Social Stratification after WWII: Changes of the actual differentials / changes of the awareness of differentials

Eisuke HISAI

We can see many excellent historical studies about the relation between reading behavior and social stratification in Japan before WWII. These studies succeeded in describing the differences of reading behavior between social classes by using not only quantitative data but also various qualitative data. However, we have never seen such studies that apply these viewpoints to reading behavior after WWII.

My tentative study consists of two essays. First, I investigated changes of the differentials of reading rate by using several surveys which have been made continuously after WWII. In the high-growth period, the reading rates both in cities and villages rose much. On the other hand, the differentials between social classes scarcely changed during this period. Moreover, we can confirm the obvious differences of favorite genres, reading time, and expenses for books between social classes. The structure of these differences is very similar to that we had before WWII.

Second, I described an outline of changes of discourses about the relation between reading behavior and social classes after WWII. I examined the articles and papers on *The Science of Reading* edited by the Japan Association of Reading since 1957. The articles and papers which were based on analytic framework of social stratification extremely reduced in 1970s. After the high-growth period, the discourses about reading have lost the awareness of social stratification.

目次

I 本論の問題設定

- A はじめに
- B 戦前期の「読書と階層」をめぐる研究
- C 戦前と戦後の「架橋」
- D 戦後に関する先行研究の動向と本論文の作業

II 「読書行動と社会階層」の関連性の実態

- A 「読書率」の推移
- B 読書の内容・形態

III 「読書行動と社会階層」へのまなざしの変容

- A 戦後初期における「読書階級」へのまなざし

B 社会階層へのまなざしの希薄化

C まなざしの変容の背景

IV 結論と課題

- A 社会階層という視座の効力
- B おわりに

注・引用文献

I 本論文の問題設定

A はじめに

多様な動機や行動様式に開かれた「読む行為」の実態を歴史的に辿る読書史／読者史研究は、教育研究、マスメディア研究、日本文学研究等で従来から様々に展開されてきた。また図書館学研究の一環としても読書史・読

*生涯教育計画コース 博士課程5年

者史が扱われてきたが、そもそも社会教育の思想・実践・施策の立脚する基層の重要な一部を「読書」という行為が形成しているという点で、読書・読者史研究は、図書館という施設・制度にのみ限定されない社会教育研究としての重要な意味を持つ領域であろう。

本論文は、読書という行為を素材として、戦後の自発的学習行動の歴史的変遷を捉える試みとして位置づけられるが、その際に本論の切り口となるのは社会階層の視点である。本論文では、戦後における社会階層と読書行動の関係の実態の変化、及びその関係を捉える「まなざし」（＝社会事象に対する、学術的・非学術的を問わぬ、認識の時代的傾向）の変化を、検証・考察していきたい。

B 戦前期の「読書と階層」をめぐる研究

本論文の作業に先立ち、戦後の読書行動と社会階層というテーマを歴史的考察として扱うことの研究史的背景を確認したい。論点を先取するならばその背景とは、戦前の読書と社会階層との関連を論ずる研究の展開に比して、戦後のその変遷を正面から扱う考察、或いは戦前を対象とした議論を戦後に関する考察に受け継ぐ形の歴史的検討が、先行研究に殆ど見られないという点である。本論文の試みはその点への注目から出発している。

戦前期、特に都市社会内の階層格差や都市－農村格差が深刻な問題として認識されだした大正・昭和初期について、当時行われ始めた読書調査やその他の質的史料を用いて読書行動と社会階層との関係を考察した先行研究は少なくない。先駆としては、質的・量的データを使用して当時の婦人雑誌の主な読者層が新中間層であったことを論じた、前田愛の考察が挙げられる¹⁾。その後、特定の雑誌、ジャンルについての考察は多数提示されてきたが²⁾、「読書の階層性」の全体的見取り図を提示したものはさほど多くない。第一に挙げられるのは、当時の読書調査を基に、新中間層と上層労働者層が大衆化された書籍、雑誌メディアの主要な購入層だったと論じた有山輝雄の考察である³⁾。さらに包括的な議論を提示したのは、「読書階級」としての新中間層と、読者層の周辺的位置にありながら次第に読書行動が普及しつつあった労働者層、農業層との対比で読書の階層性を考察した永嶺重敏である⁴⁾。特に永嶺は、調査データが整備されていない時期の読書の階層差とそれを規定する意識・価値の構造を、多様な質的史料を併用して説得的に描いた点で卓越している。本論文でも戦前期の「読書と社会階層」の関係の大枠を彼の研究に依拠して考察している。

C 戦前と戦後の「架橋」

以上のような「戦前の読書と階層」に関する諸研究は、

戦前における読書行動と社会階層との密接な関係性を、統計的傾向だけでなく価値や意識のレベルまで明らかにしてきた。しかしこれらは専ら、その知見と戦後の状況との関係を判然とさせていない。それは、例えばこれらの研究が、戦後は新中間層の読書行動を核として日本人の読書が均質化した、といった無頓着な前提を置いていることにも起因すると思われる⁵⁾。それに対し、これらの戦前期研究で明らかにされた「読書の階層性」は、寧ろ戦後の読書行動を長期的視野で見るとこそ有効な視角となる、と捉えるのが本論文の立場である。

無論、戦後においては『読書世論調査』（毎日新聞社）や『全国農村読書調査』（家の光協会）といった終戦直後からの継続的調査のデータが比較的整備されていることで、かえって読書行動と階層との関係性を改めて歴史的に問おうとする契機が乏しくなっていることもあろう。しかし戦後の読書行動と社会階層との関係の推移を問い、また戦前期に関する先行研究との架橋を目指すことは、戦前期研究がある程度進んだ現時点において必要なのではないか。近代日本における社会階層の急速かつ大規模な構造変容が第二次大戦の前後よりも寧ろ60年代から70年代初頭に生じた⁶⁾ことを踏まえれば、「読書と社会階層」という論点においては、大正・昭和初期における両者の関連が戦後初期にいかに引き継がれ、また高度成長期においてどう変化を被りつつ現代に至っているのか、という視点から検討することが求められる。その作業によって初めて、我々は戦前期を対象とする先行研究の意味を、現代と接続して把握することも可能となる。

読書に関して階層間比較の出来る量的調査が戦前期には乏しいため、本論では先行研究による戦前の読書の階層性に関する質的な指摘が、戦後にどの程度見いだせるかを検討するに留まる。しかしそれだけでも戦前期に関する研究の意義を再検討するには有用であろう。

D 戦後に関する先行研究の動向と本論文の作業

戦後日本の読書・読者像に関し、その変遷を長期的に捉え直す考察自体は比較的多く見られる。70年代以降の研究の中では例えば、『読書世論調査』に依拠してベストセラーの推移を考察した岡田滋男や、「知識人と大衆」という論点を軸とした前田愛、『読書世論調査』に直接関わった立場から読書傾向の変遷を捉えた越谷和子、等々に挙げられる⁷⁾。しかしこれらのいずれも、戦後の階層と読書行動との関係を見る視点は明確ではない。そもそも「階層と読書」に関する言及自体、近年の読書・読者研究において目立つものではない。和田敦彦は最近の論考まで含む読書・読者研究動向の広範なレビューを行っているが⁸⁾、その中に戦後の社会階層との関連を正

面から扱ったものは殆ど見られない。近年の諸雑誌における「読書」「読者」関連の特集にも、階層との関連を扱ったものは同じく見られない⁹⁾。80, 90年代の読書論・読者論に関する『出版研究』誌上のレビュー論文や¹⁰⁾、『図書館学会年報』に73年以降掲載されている年次文献目録中の「読書」の項目でも、戦後の社会階層と読書行為との関係を長期的に見た論文に言及するものは見られない。因みに50, 60年代の出版関係者向け雑誌や日本文学研究雑誌における読者研究には、長期的な視野ではないが、階層との関連を論ずるものは少なからず存在する。本論文でも考察の中で適宜それらに言及したい。

いずれにせよ、戦後日本における読書行動と社会階層との関連を長期的視野で捉える考察、まして戦後の推移を戦前期研究との連続において捉えようとした考察は殆どこれまで見られなかった。これらの先行研究の状況に鑑みても、本論文の考察の意義は認められよう。

本論文では、次の通り考察を行う。第一に、戦後の継続的な読書調査を70年代まで辿り、戦後初期から高度成長期以降に至るまでの読書行動と社会階層との関係の推移を明らかにする(II章)。第二に、読書行動と社会階層の関連に対する研究者、教育関係者らのまなざしが、戦後初期から70年代まででどう変化したのかを、『読書科学』誌上の論文・記事の変遷や、その他読書を巡って展開される諸言説等を基に検討する(III章)。戦後初期から70年代までという時期設定は、前述の通りこの時期が戦後における社会階層構造の急速な変容過程を概ねカバーできる時期にあるためである。以上の作業において、大正・昭和初期に関する先行研究の知見との連続性を検討することも不可欠の作業となる。これらを基に、総括的考察を最後に提示する(IV章)。

なお本論文において「社会階層」(「階層」と略して記した箇所もある)とは、職業と大きな関連をもった、社会・経済的生活条件における差異を示すカテゴリー、として捉えており、実際の指標としては諸調査の職業区分を用いた。また職業区分に対応する社会階層の主な分類として、新中間層、旧中間層、農業層、労働者層(上層/下層)といったカテゴリーを使用した¹¹⁾。

本論文では社会階層の視点から問題構造を取って単純化して把握しており、ジェンダー変数や年齢変数、ミクロレベルでの行為といった側面が排除されるという、階層研究一般に指摘される弱点を確かに有している。また「ピラミッド型に順序づけられた階層」という社会的事実が「完全順序」として存在しないという、階層分析への根元的批判¹²⁾も見逃せない。しかしある視点の設定がその射程外の要素の単純化をもたらすことは必然であり、その危険を踏まえた上でも、読書行動とその変遷に

対する社会階層の視点の重要性は失われたいと考える。

II 「読書行動と社会階層」の関連性の実態

A 「読書率」の推移

まず毎日新聞社編『読書世論調査』等から、読書率(書籍、雑誌を読んでいるか否か)の推移を見たい。『読書世論調査』は、1947年以降継続的に行われている、全国の16歳以上の男女を対象とした読書調査であり、多段式層化無作為抽出法に基づいてサンプリングを行い、面接、留置調査で回答を得ている。データの継続性、包括性では他の様々な読書調査で比肩し得るものはない。年代により調査項目は変化してきたが、職業別、地域別(大都市、市部、郡部)の集計はほぼ一貫して継続している。

図1, 2は、同調査のデータに基づく職業別、地域別の雑誌・書籍読書率である。ここからわかるのは、第一に地域別の格差よりも、職業別の格差の広がり大きいという点である。第二に、地域別の場合、雑誌で戦後初期に、書籍で高度成長期に各々全体としての底上げ傾向が見られるのに対し、職業別の場合、格差構造が比較的持続しているという点である。第三に、職業別で見た場合、格差は雑誌より書籍の方が大きいという点である。

第一、第二の点から、都市-地方格差が全体の底上げ傾向により目立たなくなる(格差が消失した訳ではないが)のに対し、階層格差の構造は、高度成長を経ても同型のまま持続し続けたということが出来る。無論この間の書籍・雑誌購買力は一貫して上昇しており、どの階層でも読書に対する経済的制約が飛躍的に減少したことは明らかである¹³⁾。しかし購買力の上昇、或いは書店・図書館等の増加による社会全体における書物へのアクセシビリティの向上にも関わらず、新中間層(「幹部・自由業」と「官公庁・大企業事務員」)→旧中間層(「自営業」・労働者上層(「熟練・技能」)→労働者下層(「単純労働者」)・農業層という戦前の階層格差を思わせる構造が、少なくとも70年代に至るまで持続しているのである。

ちなみに家の光協会の『全国農村読書調査』¹⁴⁾のデータからは、給料生活者と農業従事者の格差が、図3のように見いだせる。農村部に重点を置いたこの調査のデータでも、職業に対応した格差が持続的に見られ、またその格差は雑誌より書籍に顕著に現れている。ここからも単に地域別よりも社会階層の視点の方が、読書行動の格差構造を見る上で有効であり続けていることがわかる。

これらの格差は総じて、大正・昭和初期における読書の階層性と相似の構造にある。書物全般、特に円本や文庫等廉価版の書籍や『文藝春秋』『中央公論』等の総合雑誌への強い志向のみならず、書物自体が「階級的同一性の標識となっていた」新中間層¹⁵⁾、読書能力を増しつつ

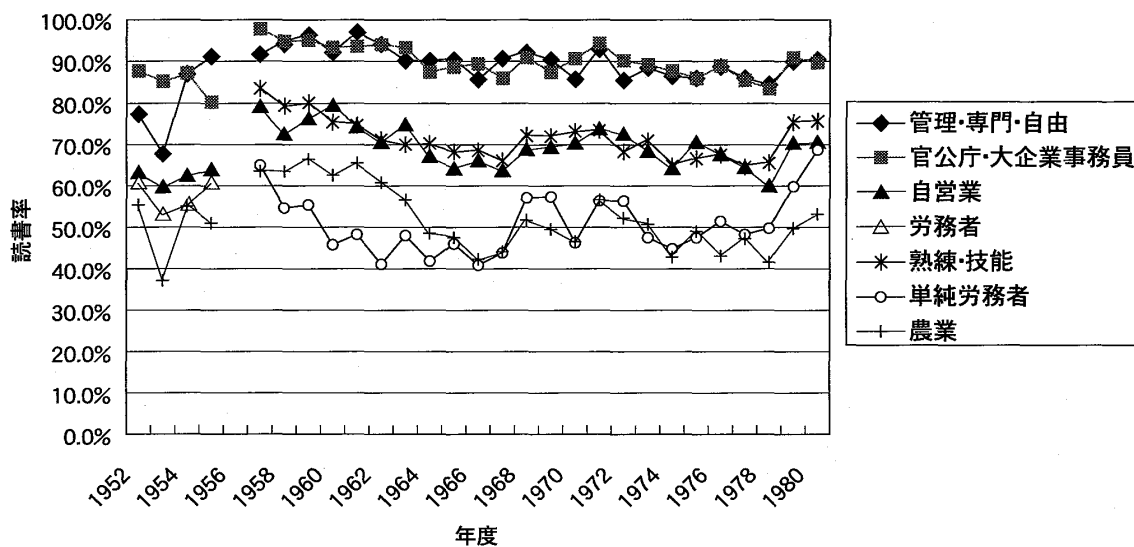


図1-1 雑誌読書率と職業

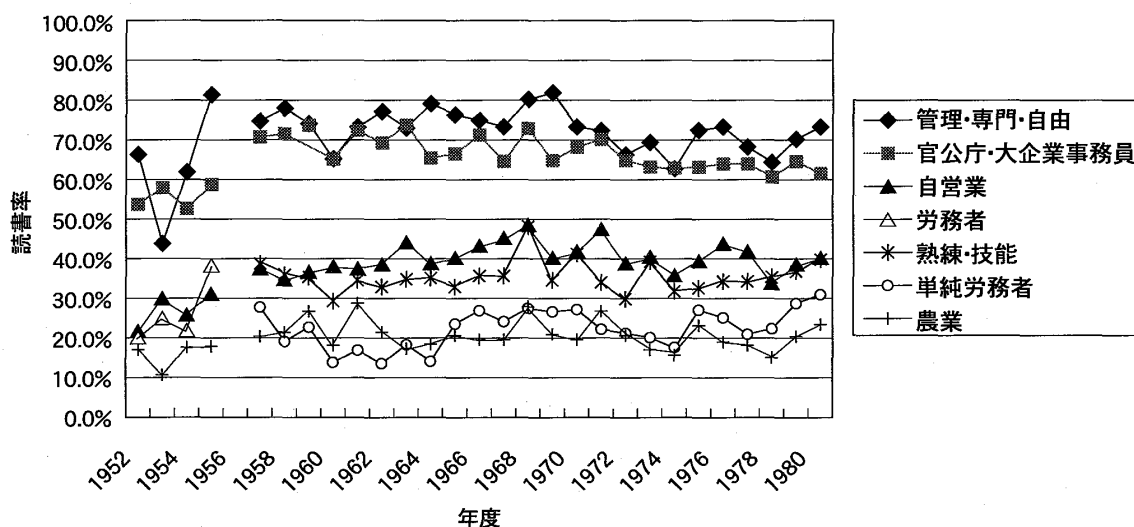


図1-2 書籍読書率と職業

注1) 1956年のデータは欠損。初期の調査において、回答未回収のサンプルを相対度数の母数に含めている年度があるため、その場合は不明数を除いた上で読書率を算出し直した(図2も同様)。

注2) 職業区分については社会階層の指標となる主なもののみに記した。1967年までは男女で職業区分が異なる。女性の区分は「有職」「無職」等の分類になっており、社会階層を表す指標として利用しづらいため、1967年までは男性のみを対象とした。同調査の職業区分は何度か変化しているのも、適切と思われる項目を下記の通り連続するものと捉えたが、厳密な一貫性には欠けることを留意されたい。

「管理・専門・自由」:「官公庁、大会社の幹部、自由業」(1952～77年),「経営、管理、専門的職業、自由業」(78年～)

「官公庁・大企業事務員」:「給料生活者」(1952～55年),「官公庁・大企業事務員」(57～63年),「事務・技術系」(64～77年),「事務的職業」(78年～)

「自営業」:「商工業」(1952～63年),「中小企業主、商店主」(64～78年),「自営業主」(78年～)

「労務者」:「労務者」(1952～55年)

「熟練・技能」:「工具、職人、運転手」(1957～63年),「労務系」(64～77年),「熟練、技能的職業」(78年～)

「単純労務者」:「単純労務者」(57～77年),「労務的職業」(78年～)

「農業」:「農業」(1952～55年),「農漁業」(57～77年),「農林漁業」(78年～)

出典:毎日新聞社編『読書世論調査』各年度版。

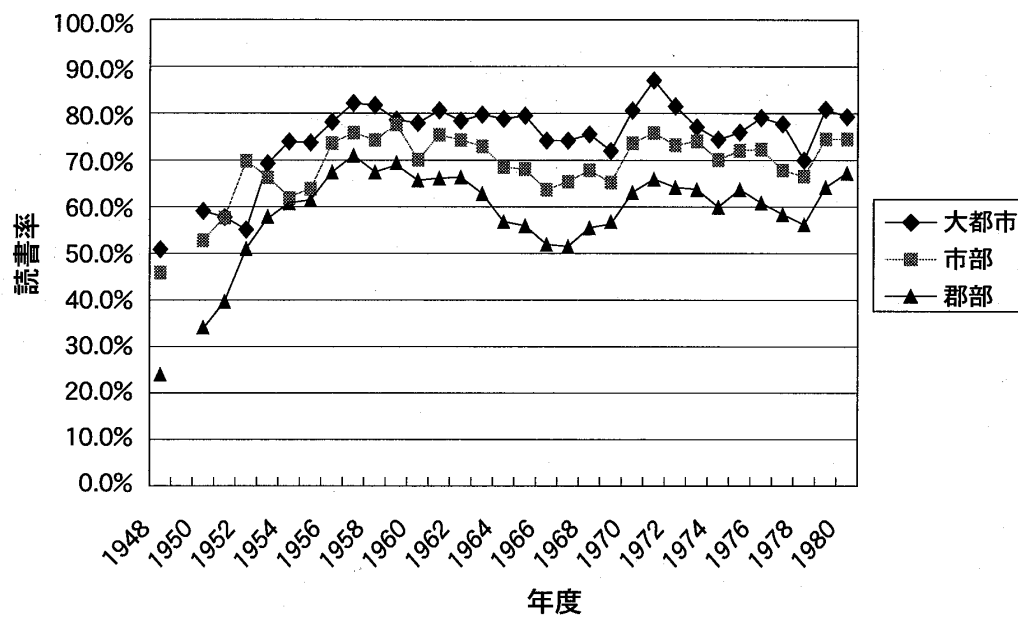


図2-1 地域別の雑誌読書率

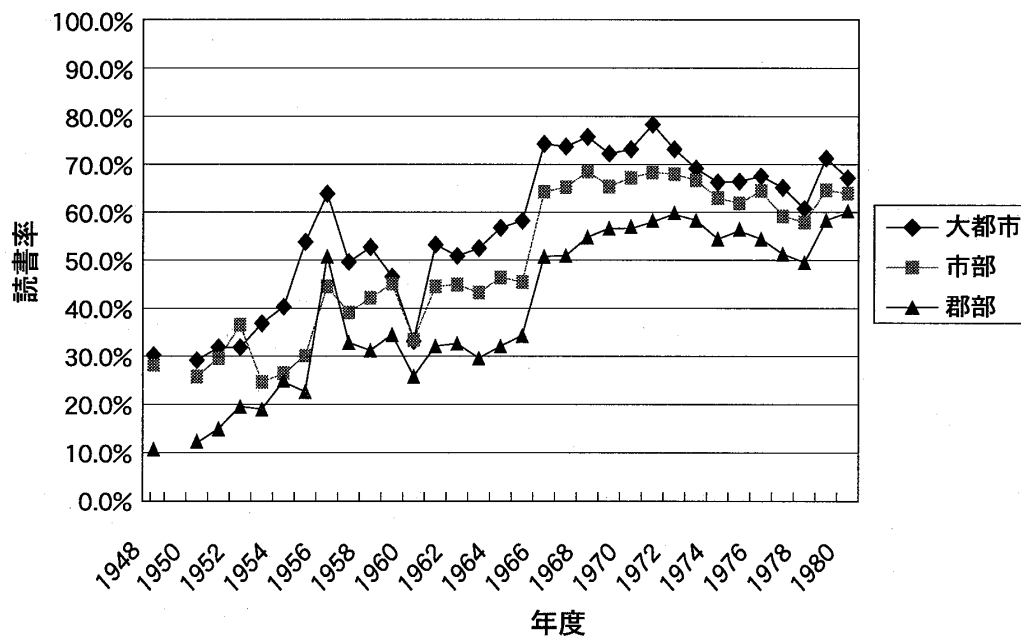


図2-2 地域別の書籍読書率

注 1) 1949年のデータは欠損。

注 2) 大都市は、1962年までは六大都市、1963～1970年は七大都市(北九州市を追加)、1971年以降は十大都市(福岡市、広島市、札幌市を追加)。1976年以降の市部は、「中都市」(10万人以上)「小都市」(10万人未満)に区分されているため、読書率を筆者がデータから算出し直した。

出典：毎日新聞社編『読書世論調査』各年度版。

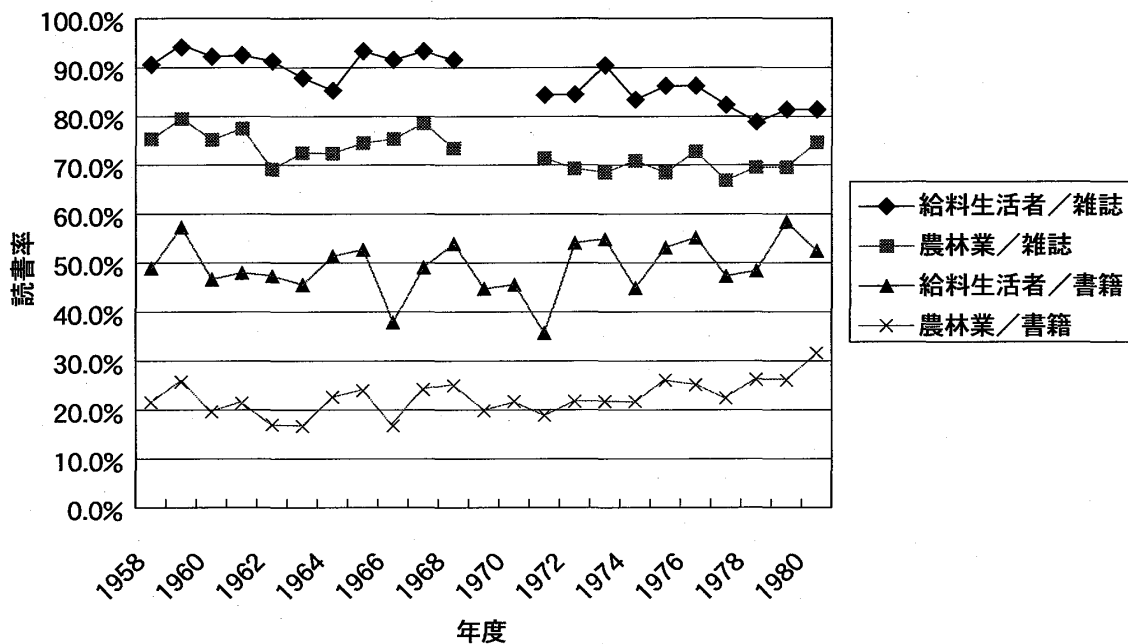


図3 農村部における雑誌・書籍読書率と職業

注1) 1969, 70年の雑誌読書率のデータは欠損。

注2) 上記以外の職業区分は断片的にしかデータが得られないので、ここでは記載しなかった。

出典：家の光協会編『農村と読書（全国農村読書調査）』各年度版。

も、娯楽としての雑誌講読が読書の中心であり読書することが本質的な「エートス」ではない労働者層¹⁶⁾、長らく読書から隔絶されつつも、昭和初期には雑誌読者層として台頭してきた農業層¹⁷⁾、という永嶺が示した見取り図の延長がここに見て取れる。また労働者上層が新中間層にやや接近した位置にある点は、書物、特に書籍の戦前期における普及が、新中間層と労働者上層においてまず進んだという有山の指摘¹⁸⁾に連なるものであろう。

また第二、第三の点として言及した、雑誌と書籍との読書率の上昇時期の違いは、雑誌が書籍よりも先行して普及・大衆化した大正・昭和初期を継承して戦後の状況が展開していることを窺わせる。雑誌の方が書籍よりも階層格差が大きく現れていることも、大衆化の面で書籍が後発の位置にある（或いはより「上級財」に近い）ことを示しているといえる。また書籍は主に新中間層に、雑誌が新中間層だけでなく労働者層や農業層に、という戦前期のメディア形態の差異とそれを受容する階層との関係も、ここで明確に確認されるのである¹⁹⁾。

B 読書の内容・形態

次に読書の内容、形態の階層差について、『読書世論調査』等から得られたいくつかの傾向を見てみたい。

表1は、毎号買う雑誌のジャンルを職業別に示したも

のである。新中間層の「総合雑誌」購読率の高さ、労働者層の「スポーツ・娯楽」購読率の高さ、農業層の「産業・社会・労働」購読率の高さが特に目立つ。また週刊誌は大衆的な要素を持ちつつも、新中間層により広く読まれるという独自の位置も見えて取れる。なお農業層の「婦人・生活」購読率が格別に高いのは、『家の光』が「生活」のジャンルに含まれているためである。

表2は、総合雑誌の代表格としての『中央公論』、『文藝春秋』、50年代後半から60年代にかけて急速に大衆的に普及した週刊誌の代表格としての『サンデー毎日』、農業層に特化した『家の光』、大衆的娯楽雑誌としての『平凡』について、各々職業別の購読ないし読書率を見たものである。元のデータの実数の値が小さく、偶発的な要素に影響を受けている可能性はあるが、表1の場合と同様、職業ごとのジャンルの偏りが概ね認められる。ここから、昭和初期の「読書階級」を象徴する『中央公論』『文藝春秋』が、引き続きその主な読者層を維持していることがわかる。また『平凡』と『サンデー毎日』、特に後者は、農業層や労働者層の読者を比較的多く得ているが、労働者上層がややその中でも抜け出しており、この階層の中間的な位置が読みとれる。また昭和初期において農業層を最も引きつけた雑誌は、当初は国民的大衆雑誌といわれた『キング』、ついで農村を主対象とする『家

表1 毎号買っている雑誌と職業

1950年

(%)

| | 自由業 | 給料生活者 | 商工業 | 農業 | 労務者 |
|----------|------|-------|------|------|------|
| 総合雑誌 | 38.2 | 39.4 | 15.0 | 4.2 | 8.8 |
| 時局もの | 16.5 | 26.3 | 23.1 | 3.5 | 9.1 |
| 人文科学 | 22.6 | 19.5 | 7.0 | 1.4 | 1.0 |
| 自然科学 | 43.5 | 8.4 | 6.2 | 1.3 | 4.8 |
| 文学・芸術 | 14.8 | 14.5 | 6.6 | 2.8 | 5.1 |
| スポーツ | 18.3 | 23.9 | 29.9 | 9.7 | 31.2 |
| 婦人・生活 | 9.6 | 6.2 | 7.3 | 14.8 | 2.9 |
| ダイジェスト | 13.1 | 20.2 | 14.1 | 5.9 | 9.3 |
| 産業・社会・労働 | 9.6 | 9.0 | 8.8 | 36.6 | 0.8 |
| その他 | 2.6 | 5.0 | 3.1 | 3.5 | 1.6 |

1960年

(%)

| | 自由業・幹部 | 官公庁・大企業事務員 | 自営業 | 農業 | 熟練・技術 | 単純労務者 |
|----------|--------|------------|------|------|-------|-------|
| 総合雑誌 | 31.9 | 38.8 | 26.1 | 4.9 | 19.1 | 14.3 |
| 人文科学 | 14.2 | 14.6 | 6.3 | 1.7 | 3.9 | 0.0 |
| 自然科学 | 7.8 | 4.1 | 1.5 | 0.3 | 1.7 | 0.0 |
| 文学・芸術 | 9.9 | 12.6 | 12.6 | 2.8 | 9.1 | 14.3 |
| スポーツ・娯楽 | 9.2 | 10.4 | 18.0 | 5.3 | 34.9 | 50.0 |
| 婦人・生活 | 17.7 | 10.6 | 28.8 | 57.4 | 19.1 | 21.4 |
| 産業・社会・労働 | 4.3 | 6.3 | 4.8 | 25.6 | 8.7 | 0.0 |
| その他 | 5.0 | 2.8 | 2.7 | 2.0 | 3.5 | 0.0 |

注1) 1950年の表は、各々の職業のうち何%が購入しているかを表示したもので、縦の合計は100%にならない。1960年の表は、職業別に回答雑誌数総数を母数とした百分率(縦に100%)で表示している。

注2) 男性のみ。職業分類の呼称については図1参照。「学生」「その他」などの属性は省略した(表2～4, 6も同様)。出典: 毎日新聞社編『読書世論調査』各年度版。

の光』へと変遷したが²⁰⁾、戦後においても農業層の読書傾向がその延長線上にあることがわかる。

次に、50年代前半における読書費用や読書形態の傾向の職業別の違いを、『読書世論調査』等のデータから表3～6に示した。表3からは、新中間層→旧中間層→労働者層・農業層の順に書物に多く支出する傾向が見出せる。表4からは、特に新中間層とその他の層との間に読書時間の格差が見出せる。読書時間については、NHK放送文化研究所『国民生活時間調査』が60年代後半以降を補う継続的データとして有用である。表5には65～80年の数値を示したが、これにも同じような階層格差構造が見られる。また表6は、書物の入手方法に関するデータである。新中間層が「自分で買う」比率が最も高く、「書物を有すること」自体をアイデンティティとする「読書階級」としての戦前から特性が継承されている。また特に農業層、労働者層で「友人に借りる」が多いことも目立つ。購読率では劣位にあるこれらの階層が、仲間内

や青年団での書物の貸借関係・共有関係を基盤とする昭和初期の読書行動²¹⁾を、この時期においてもかなり受け継いで読書を営んでいたことが示唆される。但し新中間層の「職場で借りる」という回答も労働者層とともに多く、当時の新中間層にとって「職場」が読書行動における要素として見逃せないこともわかる。

このように読書・書物への接触度と行動様式は、高度成長期初期までは戦前期の階層的構造を比較的維持していた。行動様式やそれを支える意識・価値を見出せる読書の内容・形態に関する職業別分析は、『読書世論調査』では60年代までしか見られず、継続的に70年代以降の変化を確認することは難しい。労働者層や農業層が50年代の読書行動の様式を70年代以降も全くそのまま保ってきたとはとても考えられないだろう。しかし70年代以降でも明確に見られる読書率の階層格差を念頭に置けば、それが行動様式の多層性ともある程度構造的に関わっていると考えるべきであり、読書の行動様式の差が70年代以

表2 毎号読んでいる雑誌と職業 (1955, 60, 65年)

(%)

| 雑誌名 | 1955年 | | 1960年 | 1965年 | |
|------------|-------|-----|-------|-------|------|
| | 買う | 借りる | 買う | 買う | 借りる |
| 『文藝春秋』 | | | | | |
| 幹部・自由業 | 19.8 | 1.1 | 14.5 | 19.5 | 8.4 |
| 官公庁・大企業事務員 | 16.2 | 3.6 | 15.2 | 9.4 | 7.7 |
| 自営業 | 5.9 | 1.7 | 6.8 | 5.5 | 0.9 |
| 農業 | 1.2 | 0.1 | 0.8 | 1.1 | 0.9 |
| 労務者 | 3.6 | 1.9 | — | — | — |
| 熟練・技能 | — | — | 3.2 | 3.1 | 1.0 |
| 単純労務者 | — | — | 0.8 | 0.0 | 0.0 |
| 『中央公論』 | 買う | 借りる | 買う | 買う | 借りる |
| 幹部・自由業 | 4.4 | 0.0 | 4.2 | 6.5 | 3.2 |
| 官公庁・大企業事務員 | 2.8 | 0.8 | 6.4 | 2.0 | 2.5 |
| 自営業 | 1.0 | 0.0 | 1.4 | 0.6 | 0.6 |
| 農業 | 0.2 | 0.0 | 0.3 | 0.4 | 0.0 |
| 労務者 | 1.1 | 0.4 | — | — | — |
| 熟練・技能 | — | — | 0.1 | 0.7 | 0.0 |
| 単純労務者 | — | — | 0.8 | 0.0 | 0.0 |
| 『家の光』 | 買う | 借りる | 買う | 買う | 借りる |
| 幹部・自由業 | 1.1 | 1.1 | 3.0 | 0.6 | 0.0 |
| 官公庁・大企業事務員 | 2.7 | 0.7 | 3.6 | 0.8 | 0.0 |
| 自営業 | 1.9 | 0.5 | 2.3 | 0.3 | 0.0 |
| 農業 | 18.4 | 2.3 | 26.6 | 10.0 | 3.8 |
| 労務者 | 1.7 | 0.0 | — | — | — |
| 熟練・技能 | — | — | 3.7 | 0.5 | 0.5 |
| 単純労務者 | — | — | 2.5 | 1.4 | 1.4 |
| 『平凡』 | 買う | 借りる | 買う | 買う | 借りる |
| 幹部・自由業 | 1.1 | 0.0 | 1.2 | 1.3 | 0.0 |
| 官公庁・大企業事務員 | 2.4 | 1.7 | 0.9 | 0.6 | 0.6 |
| 自営業 | 3.9 | 1.4 | 2.1 | 0.9 | 0.3 |
| 農業 | 2.7 | 2.1 | 1.0 | 0.4 | 0.6 |
| 労務者 | 3.1 | 4.0 | — | — | — |
| 熟練・技能 | — | — | 3.1 | 2.1 | 1.7 |
| 単純労務者 | — | — | 0.8 | 0.0 | 1.4 |
| 『サンデー毎日』 | 買う | 借りる | 買う | 買う | 借りる |
| 幹部・自由業 | 12.1 | 2.2 | 23.6 | 19.5 | 7.1 |
| 官公庁・大企業事務員 | 14.8 | 3.0 | 19.8 | 11.6 | 10.4 |
| 自営業 | 10.2 | 1.4 | 11.7 | 8.1 | 6.1 |
| 農業 | 2.9 | 0.8 | 3.8 | 3.8 | 3.8 |
| 労務者 | 4.2 | 3.8 | — | — | — |
| 熟練・技能 | — | — | 10.0 | 4.8 | 6.9 |
| 単純労務者 | — | — | 4.2 | 4.3 | 1.4 |

注1) 1960年には「借りる」のデータはない。1965年の「借りる」は「いつも読む」から「買って読む」を引いた推計値。

元のデータは実数表示であり、各年度の職業別回答者数を母数として百分率を算出した。

出典：毎日新聞社編『読書世論調査』各年度版。

降全く消失したとも言い難いのではないか。

III 「読書行動と社会階層」へのまなざしの変容

A 戦後初期における「読書階級」へのまなざし

前述の通り永嶺らは「読書階級」としての大正・昭和初期の新中間層の特性を描いたが、前章で確認したように、戦後も実態としてその新中間層が読書への強いコミットメントを有する層であり続けたといえる。

この新中間層と読書との関係を特有のものとして捉える視座は、50年代から60年代前半に展開された読書・読者論においては、比較的多く見られるものであった。

例えば、50年代から60年代にかけて日本文学研究者中心に議論された「中間小説」概念が挙げられる。これは、極めて特権的なエリートを対象とする文学と極めて大衆的な文学との中間にあって、新中間層を主要な対象とする文学作品が、独自の厚みをもって台頭しつつあるという議論であったが²²⁾、その層が単なる「大衆」ではなく新中間層として同定されていたことに、「読書階級」として新中間層を位置づける認識を見ることが出来る。

「読書階級」「読書人」は、当時でも読書に親和的な新中間層を指す語としてしばしば使われ、それは実質を伴った認識として捉えられていた。『読書世論調査』の54年度の特集企画「『読書人』はどう読むか」では、書店の顧客(=「読書人」)を対象とする調査が行われたが、「読書人」の66.6%は新中間層であった²³⁾。50年代後半の読書調査にも「読書人」の実質を新中間層と規定する記述が見られる²⁴⁾。60年代始めでもなお、或る文学研究者にとって、読書の大衆化を担っているのは依然「えらばれたる階層」であり、その背後には読書人ではない「広範な大衆層」の存在が、意識されていたのである²⁵⁾。

他方、「不読」の問題は50年代までは特に、社会階層と地域格差とが交わる系として認識されていた。即ち農村地域、農業層の不読者層の問題である²⁶⁾。この認識は基本的に、農村の経済的貧困と、書物へのアクセシビリティの相対的貧困さという背景により規定されていたと言える。無論、都市社会の中での格差(例えば労働者層の読書行動)の問題が議論されなかった訳ではないが²⁷⁾、「都市と農村」という枠組が社会階層の格差と重ねられつつ認識されることが多かったということはできよう。

B 社会階層へのまなざしの希薄化

II章で見たように、終戦直後から高度成長期、そして70年代に至るまでの読書行動の階層格差は、さほど縮小することなく持続していた。しかし読書行動と社会階層の関連へのまなざしは、当初は前節に見たように戦前の枠組みを保持していたが、高度成長とともに次第に、読

表3 雑誌・書籍にかかる費用と職業 (1953年)

(%)

| | 雑誌 | | | | | | 書籍 | | | | | |
|--------|--------|----------|----------|----------|--------|------|--------|----------|----------|----------|--------|------|
| | 100円以下 | 101～150円 | 151～200円 | 201～300円 | 301円以上 | 無回答 | 200円以下 | 201～300円 | 301～400円 | 401～500円 | 501円以上 | 無回答 |
| 幹部・自由業 | 20.4 | 16.7 | 18.5 | 5.6 | 38.8 | 0.0 | 7.2 | 4.8 | 7.5 | 7.2 | 30.9 | 40.5 |
| 事務員 | 12.3 | 8.5 | 12.4 | 9.9 | 22.9 | 34.0 | 10.3 | 13.8 | 10.1 | 8.3 | 20.6 | 36.9 |
| 自営業 | 13.2 | 7.5 | 15.5 | 11.2 | 13.4 | 39.2 | 7.8 | 17.5 | 6.6 | 6.0 | 12.7 | 49.4 |
| 農業 | 27.9 | 8.0 | 7.9 | 3.1 | 2.6 | 50.5 | 15.7 | 4.3 | 2.6 | 2.6 | 2.3 | 67.5 |
| 労務者 | 16.4 | 8.7 | 12.7 | 6.9 | 8.0 | 47.3 | 10.5 | 15.0 | 10.5 | 1.1 | 4.4 | 58.5 |

注1) 横の合計が100%。

出典：毎日新聞社編『読書世論調査』1953年度版。

表4 週あたりの読書時間と職業 (1952年)

(%)

| | 3時間以内 | 3時間～7時間 | 7時間～14時間 | 14時間～20時間 | 20時間以上 | 無回答 |
|--------|-------|---------|----------|-----------|--------|------|
| 幹部・自由業 | 16.1 | 24.1 | 27.7 | 10.9 | 7.3 | 13.9 |
| 事務員 | 16.6 | 26.3 | 25.6 | 10.5 | 5.9 | 15.1 |
| 自営業 | 22.4 | 27.1 | 18.4 | 4.0 | 2.4 | 25.7 |
| 農業 | 24.3 | 26.7 | 11.8 | 3.2 | 3.4 | 30.6 |
| 労務者 | 18.6 | 26.5 | 20.0 | 3.5 | 2.1 | 29.3 |

注1) 横の合計が100%。

出典：毎日新聞社編『読書世論調査』1952年度版。

表5 一日の読書時間と職業 (1965～80年)

(分)

| | 1965 | 1970 | 1975 | 1980 |
|----------|------|------|------|------|
| 専門 | 84 | — | 72 | 58 |
| 管理 | 81 | — | 55 | 65 |
| 経営・管理・専門 | — | 54 | — | — |
| 事務技術 | 55 | 44 | 45 | 47 |
| 小企業者 | 39 | 38 | 31 | 36 |
| 熟練労働 | 37 | — | — | — |
| 労務従事 | 27 | — | — | — |
| 技能・作業 | — | 32 | 32 | 31 |
| 農林業従事 | 19 | 13 | 15 | 18 |

注1) 平日の平均。1960年の調査データもあるが、職業別の平均時間が算出できないため割愛した。

注2) 「小企業者」は1970年以降「商工自営」, 「専門」は1975年以降「専門・自由」, 「管理」は1975年以降「経営・管理」。

出典：NHK放送文化研究所編『国民生活時間調査』各年度版。

表6 書物を入手する主な方法と職業 (1955年)

(%)

| | 図書館で読む | 職場で借りて読む | 巡回文庫で借りて読む | 貸本屋で借りて読む | 友人に借りる | 父兄に買ってもらう | 自分で買う | 家にある本を読む | その他 | 無回答 |
|--------|--------|----------|------------|-----------|--------|-----------|-------|----------|-----|------|
| 幹部・自由業 | 13.1 | 3.6 | 2.1 | 4.8 | 17.9 | 6.0 | 69.1 | 28.6 | 1.2 | 10.7 |
| 給料生活者 | 6.8 | 31.4 | 4.0 | 5.1 | 20.8 | 1.0 | 61.4 | 17.3 | 1.0 | 14.4 |
| 商工業 | 2.5 | 1.8 | 2.7 | 9.9 | 18.0 | 0.7 | 52.6 | 23.0 | 1.4 | 21.2 |
| 農漁業 | 3.2 | 1.4 | 3.5 | 2.8 | 26.5 | 1.4 | 43.2 | 27.3 | 1.7 | 20.4 |
| 労務者 | 6.2 | 21.5 | 2.6 | 10.0 | 35.5 | 1.5 | 40.0 | 22.1 | 1.2 | 20.0 |

注1) 横の合計が100%。

出典：毎日新聞社編『読書世論調査』1953年度版。

書を巡る言説の中で希薄になっていったと思われる。

この点を時系列的に検討するための素材として、日本読書学会が1957年より刊行している『読書科学』誌(季刊)をとりあげる。同誌は主に教育学者、教育関係者による投稿・執筆が中心となっており、教育・学習という観点で「読書」「読者」がどう捉えられ、またその捉えられ方がどう変遷したかを見るのに適した素材と言える。また時期的にも高度成長初期からの年代をカバーしており、継続的なテキスト分析に適していよう。

表7は同誌の全記事数と、社会階層差を分析枠組として明確に採用している論文・記事数とを、創刊時から1980年代初頭までカウントしたものである。まず、統計分析で階層変数を用いた、或いは間接的に階層差を示唆する分類(「都市」と「農村」,「僻地」等)を用いた論文・記事、統計分析ではないが社会階層に関する明確な記述のある論文・記事を、表のBに該当するものとした。ここからは、当初マイナーではなかった階層分析の志向が、

60～70年代にかけて次第に希薄化していったことが見出せる。比較対象として、読書行動を生理学的或いは心理学的手法で分析する論文・記事数(C)の推移も記載した。この種の論文・記事は全体に対する割合を増加させている。このことは、専門的分析手法を持つ研究者集団が次第に形成され、彼/彼女らの業績が階層分析よりも学術雑誌において優位な位置を獲得した、ということを示すに過ぎないのかもしれないが、いずれにせよ同誌上における研究視角には、社会背景を括弧に入れて、読書する行為自体を内在的に読み解こうとする傾向が強くなってくる。無論ここで示したカウント方法は厳密には恣意性を免れ得ないが、少なくとも「読者」「読者」が社会に埋め込まれた存在・行為であるという視点が次第に欠落していったということは指摘できよう²⁸⁾。

他にも似た趨勢を表す例は同誌・同学会の動向に見られる。同誌が当初掲載していた、毎年の研究動向のレビューには、読書に関する社会学的研究も含まれ(執筆

表7 『読書科学』誌の論文・記事の傾向の変化(1957～81年)

| 発行年度 | (A)全論文・記事数 | (B)階層変数を使用した論文・記事数 | (C)心理学的・生理学的分析を使用した論文・記事数 | B/A (5年おき) | C/A (5年おき) |
|------|------------|--------------------|---------------------------|--------------------|--------------------|
| 1957 | 26 | 5 | 4 | 1957～1961 10.9% | 1957～1961 18.2% |
| 1958 | 36 | 6 | 6 | | |
| 1959 | 34 | 2 | 6 | | |
| 1960 | 39 | 4 | 7 | | |
| 1961 | 30 | 1 | 7 | | |
| 1962 | 26 | 7 | 9 | 1962～1966 10.3% | 1962～1966 28.7% |
| 1963 | 14 | 0 | 3 | | |
| 1964 | 29 | 2 | 10 | | |
| 1965 | 36 | 2 | 7 | | |
| 1966 | 31 | 3 | 10 | | |
| 1967 | 31 | 2 | 14 | 1967～1971 5.0% | 1967～1971 23.5% |
| 1968 | 36 | 2 | 4 | | |
| 1969 | 21 | 2 | 4 | | |
| 1970 | 15 | 0 | 2 | | |
| 1971 | 16 | 0 | 4 | | |
| 1972 | 22 | 2 | 5 | 1972～1976 4.0% | 1972～1976 37.3% |
| 1973 | 15 | 0 | 5 | | |
| 1974 | 12 | 1 | 7 | | |
| 1975 | 11 | 0 | 3 | | |
| 1976 | 15 | 0 | 3 | | |
| 1977 | 9 | 0 | 2 | 1977～1981 0.0% | 1977～1981 43.5% |
| 1978 | 13 | 0 | 10 | | |
| 1979 | 13 | 0 | 8 | | |
| 1980 | 18 | 0 | 10 | | |
| 1981 | 16 | 0 | 7 | | |

注1) 実際には巻が二つの年度に跨っていたり、編集上の都合から実際の発行年月と記載された発行年月とがずれている巻号もある。ここでは便宜上、全て巻数に基づいて(1巻を1957年とする)発行年度を集計した。

者は主に古野有隣), 階層と読書の関係に関する記述が1970年(13巻1・2合併号)まで例年見られた。その後この種のレビューのない時期が続く, 後に見られるレビューには, 階層研究及びそれを含む社会学的研究の項目は含まれなくなっている²⁹⁾。また同学会は独自の社会調査(名称は「読書世論調査」或いは「読書社会調査」)を学会創設当初繰り返し行っていたが, これは早くも1960年の報告書を最後に³⁰⁾, 総合的な調査は確認できなくなる。

同様のことは, 前章でデータを引用した『読書世論調査』にも或る程度当てはまる。前述の通り, 読書の内容, 形態の職業の側面からの分析は, 70年代には一部を除いて³¹⁾見られなくなる。読書の内容・形態の観点からの階層格差に関するデータが見られなくなることも自体が, 読書の階層性に対する細やかなまなざしが次第に消失したことを象徴していたといえよう。

以上は限られた対象に対する考察に留まるものだが, 「読書」に関する代表的な刊行物における内容の変遷が, 社会階層へのまなざしの消失を体現していたと見るのは, 決して無理のある議論ではないと思われる。

C まなざしの変容の背景

社会階層へのまなざしが希薄化していく傾向は, 荻谷剛彦が論じたように, この時期の教育研究全般に当てはまる趨勢であった。70年代以降, 階層と教育達成の相関関係は持続していたにも関わらず, 「貧困」の問題が教育研究や教育政策論議の中で議論されなくなると同時に, 階層の視点は「静かにフェイドアウト」していった³²⁾。このことは, 前述のように読書行動の格差が地域格差の問題, 農村・僻地の問題とかなりの程度重ね合わせて理解されていたことも関わっている。高度成長を経て日本の農業人口は急減し, 逆に新中間層は大きく増加した³³⁾。またII章で見たように都市・農村を問わず読書率は戦後初期・高度成長期を経て高まりを見せた。これらは格差問題の中核を占めていた農村における読書行動へのまなざしの希薄化にも当然影響を与えたと思われる。

また読書行動に関して, 世代やメディアの種類に関する論点が社会階層以上の問題として取り上げられるようになったことも大きい。テレビや漫画雑誌の普及の読書行動に与える影響力は, 60年代以降の『読書世論調査』ではしばしば言及されるようになる。後に, 高度成長以後の読書行動の変化が, テレビ・漫画等視覚的メディアに親和的な若年層の「書籍離れ」, 全世代における「古典離れ」の問題として, 『読書世論調査』実施当事者の目に映るようになっていた³⁴⁾ことは象徴的である。

そもそもこの階層格差へのまなざしの希薄化は, 70年

代以降の社会(科)学全般に見られる傾向でもあった。無論, 高度成長後の日本社会の「階層のなさ」を強調した「新中間大衆」論³⁵⁾には既に実証的批判がなされているし³⁶⁾, 80年代前半の消費の「多様化」「個性化」論(例えば「少衆」「分衆」論³⁷⁾)も後に, 「横並びの差異」と見える現象は寧ろ階層格差である, とする批判を受けている³⁸⁾。しかし階層格差への認識の希薄化, 或いは格差ではなく「差異」「多様化」を見いだす認識枠組は, 決して単なる言説の一人歩きではなく, 高度成長を終えた時期における, (実際には格差が存在しても)階層格差への認識度の低い社会意識に適合したものであり, それ故当時の社会認識の枠組の主流たり得た³⁹⁾。読書へのまなざしの変化も, 教育研究, 社会科学研究全体のこのような動向を背景に進行したと言える。そのことはまた, 戦前期の読書と社会階層を対象とする前述の先行研究の多くが, 戦後との連続性という論点を不問に付してきたこととも関わっていたのではないだろう。

IV 結論と課題

A 社会階層という視座の効力

本論文では, 戦後における読書の階層的構造が, 戦前の著しく極端な不均等さではないにせよ高度成長を通じて持続してきたという実態と, 同時期において次第に階層差への認識が希薄化していったというまなざしの変化とを, 概略的にではあるが辿ってきた。

高度成長期以前において, 読書行動のような自発的活動の階層差は恐らくはそれ自体のみが問題とされたのではない。読書行動の格差の背後に存在する経済, 生活, 教育上の可視的格差, 「基礎財」の格差は誰にとっても自明な「問題」であり, その自明性を背景として, 読書行動の格差の問題も語られていたと言えよう。

では, 少なくとも生活水準の可視的な階層格差が明確でない現代の日本社会において, 自発的活動の階層差は, 「基礎財」の由々しき不均等ではなく, 「上級財」の不均等という単なる「差異」なのか⁴⁰⁾。無論, 読書行動のあらゆる階層格差への対処が喫緊の課題である, とここで言いたいわけではない。しかし緊急の問題性がなければその格差の推移を辿る必要がないという態度は, 人々の学習行動或いは様々な自発的活動に対して, 現在において可視的な側面にのみ分析対象を限定するいわば視野狭窄をもたらすだろう。読書行動に即して言えば, その階層格差構造を, 自発的に選択された「多様」で「横並び」の価値の表出とのみ見なしてそれ以上検証しないならば, 自発的な選択に先立って個々人にどのような読書への選択肢が実質的に示されているのか, を問う視角が失われよう。無論, 読書を巡る行動様式の階層的特性とそ

の世代間継承性を子細に見た上で、この問題は本格的に論じられるべきだが、このことは決して流動性の高くはない戦後社会⁴¹⁾において、全く空虚な問題とは言えない。

読書行動が社会階層（とそれに応じて一定の弁別的特徴を持った行動・意識・価値の諸パターン）の影響に無縁ではあり得ないことに留意し続けることは少なくとも必要である。社会階層という分析枠組の効力を無視するほどには、我々の読書行動（あるいは社会自体）は均質的でもないし、戦前における読書の階層性と無縁でもないのである。

B おわりに

本論文は、限定された統計データ、テキストを基とする「実態」把握と、「まなざし」の変容の把握に留まったものである。読書行動における階層格差が持続しつつも、それへのまなざし自体が希薄化していったという本論の主張も、問題構造の大枠を示したにすぎない。読書行動の階層的特徴やその基底にある意識・価値形態に関する実証的分析も不十分である。また基本的に高度成長期前後に視点を定めた歴史的研究として本論文を規定したため、80年代以降現在に至るまでの読書の階層性に関する検証も敢えて行わなかった。

しかしながら、読書行動の問題を含めた人々の自発的学習行動を社会階層の観点から再検討することの意義を改めて確認するとともに、「実態」の問題と「認識」の問題の双方を長期的・歴史的視野で捉える重要性を指摘した点で、本論は試論としての目的を達したと考える。

注・引用文献

- 1) 前田愛「大正後期通俗小説の展開—婦人雑誌の読者像—」(同『近代読者の成立』岩波書店、2001年(初出1973年))。
- 2) 例えば植田康夫「〈円本全集〉による読書革命の実態—諸家の読書遍歴に見る—」(『出版研究』14号、1983年)；木村涼子「婦人雑誌の情報空間と女性大衆読者層の成立—近代日本の主婦役割との関連で—」(『思想』812号、1992年)；佐藤卓己『『キング』の時代—国民大衆雑誌の公共性—』岩波書店、2002年等。
- 3) 有山輝雄「一九二、三〇年代のメディア普及状態—給料生活者、労働者を中心に—」(『出版研究』15号、1985年)。
- 4) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997年；同『モダン都市の読書空間』日本エディタースクール出版部、2001年。
- 5) 特に永嶺はその前提を明示的に述べている。永嶺『モダン都市の読書空間』pp.242-243。
- 6) 原純輔・盛山和夫『社会階層—豊かさの中の不平等—』東京大学出版会、1999年、pp.4-8。
- 7) 岡田滋男「読書世論史(I)—「読書世論調査から」—」(『読書科学』16巻1号、1972年)；前田愛「戦後における読書の変貌」(『思想の科学』267号、1976年)；越谷和子「戦後日本人の読書傾向史」(『新聞研究』314号)；同『書籍離れ』三つの命題—読書世論調査から—(同上、426号、1987年)。
- 8) 和田敦彦『メディアの中の読者—読者論の現在—』ひつじ書房、2002年、pp.7-59。
- 9) 例えば「特集 読書」(『月刊百科』441号、1999年)；「小特集2 読書環境はどう変わるか」(『図書館雑誌』93巻10号、1999年)；「特集 読者は変わりつつあるか」(『新聞研究』587号、2000年)等。
- 10) 植田康夫「読者論」の現在」(『出版研究』20号、1989年)；同「90年代の「読者論」と「読書論」」(同上、33号、2002年)。
- 11) 以下では富永健一の戦前期の階級分類(富永『日本の近代化と社会変動—チュービンゲン講義—』講談社、1990年、pp.351-357。)のうち、「貴族」「資本家」「地主」「都市下層」を除き、「労働者」の場合に応じて二つに区分する形のカテゴリー化を基本とした。富永は戦前期の区分を「階級」と表現しているが、実質的にこれを「社会階層」と読み替えて差し支えないと思われる。
- 12) 太郎丸博「階層制の神話」(高坂健次編『日本の階層システム6 階層社会から新しい市民社会へ』東京大学出版会、2000年) pp.178-179。
- 13) 箕輪成男「書籍価格と読者購買力—出版開発における時代区分の試み—」(『出版研究』11号、1980年) pp.55-57。
- 14) 同調査は1946年から家の光協会が実施しており、現在は全国から調査地点を選定した上で、農協正組合員世帯の16～69歳の男女を対象としている。このため市部の居住者も対象となりうるが、少なくとも農村部に重点を置く調査ということは言える。なお、対象年齢の変更等、母集団の範囲の変更は幾度か行われてきた。
- 15) 永嶺『モダン都市の読書空間』pp.212-219。
- 16) 同上、pp.200-201。
- 17) 永嶺『雑誌と読者の近代』p.32。
- 18) 有山、前掲、p.52。
- 19) さらに言えばその格差構造は決して今日でも消失した訳ではない。最新の『読書世論調査』(2003年度調査)をみると、専門職、事務・技術、自営業、製造・

- サービス、農林漁業が書籍読書率で各々64, 53, 41, 41, 28, 雑誌読書率が72, 66, 56, 62, 41 (いずれも%) という格差が見られ、特に農業層の低さが目立っている。
- 20) 永嶺『雑誌と読者の近代』p.249.
 - 21) 永嶺『モダン都市の読書空間』pp.140, 142, 164-170.
 - 22) 福田宏年「中間小説の発生」(『国文学 解釈と鑑賞』27巻5号, 1962年)。
 - 23) 毎日新聞社編『読書世論調査』1954年度版, p.37.
 - 24) 「インテリ階層と読者人」(『Books』59号, 1958年)。
 - 25) 杉浦明平「戦後における文学と大衆読者の関係」(『文学』30号, 1962年) pp.40-42.
 - 26) 青柳幸一「農村家庭における読書観の研究—生徒の読書活動に対する抵抗の実態—」(『図書館学会年報』4巻1号, 1957年); 叶沢清介「不読者層対策と図書選定事業」(『図書館雑誌』420号, 1959年); 庵途巖「農家のマス・コミ接触」(『読書科学』4巻2号, 1960年); 渡辺正亥「新潟県の農村地帯における読書の実態調査」(同上, 6巻2号, 1962年)等。
 - 27) 例えば日本読書学会読書科学総合研究第三分科会「勤労青少年の生活と読書—「勤労青少年に対する読書実態調査」報告—」(『読書科学』6巻1, 2号, 1962年)。
 - 28) 本論文では詳述できないが、同誌のこの傾向は基本的に80年代以降現代まで大きく変わっていない。
 - 29) 「読書科学研究の25年」(『読書科学』26巻2号, 1982年)。
 - 30) 日本読書学会編『読書社会調査報告書第6回総括』1960年。
 - 31) 読書率以外では、「最近買った書籍」名と職業別のクロス集計のみ、70年代以降も同調査に見られる。
 - 32) 荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史—』中央公論社, 1995年, pp.54-57.
 - 33) 農林漁業就業者の比率(%)は48.0(1950年)→40.6(55)→32.5(60)→24.5(65)→19.2(70)→13.8(75)→10.8(80)→9.2(85)→7.0(90)→5.9(95)と特に70年代半ばまでに激減し、他方専門・技術、管理、事務従事者の合計は14.1(50)→15.1(55)→17.4(60)→21.5(65)→24.5(70)→28.6(75)→29.8(80)→32.3(85)→34.4(90)→35.5(95)と特に60~70年代に急増している。総務庁統計局編『平成7年度国勢調査最終報告書 日本の人口(解説編)』2000年, p.163.
 - 34) 越谷「『書籍離れ』三つの命題」pp.27-30.
 - 35) 村上泰亮『新中間大衆の時代—戦後日本の解剖学—』中央公論社, 1984年。
 - 36) 盛山和夫「中意識の意味—階層帰属意識の変化の構造—」(『理論と方法』5巻2号, 1990年)。
 - 37) 藤岡和賀夫『さよなら、大衆。—感性時代をどう読むか—』PHP研究所, 1984年; 博報堂生活総合研究所『「分衆」の誕生—ニューピープルをつかむ市場戦略とは—』日本経済新聞社, 1985年。
 - 38) 小沢雅子『新・階層消費の時代—所得格差の拡大とその影響—』朝日新聞社, 1989年, pp.207-233.
 - 39) 佐藤俊樹『不平等社会日本—さよなら総中流—』中央公論新社, 2000年, pp.86-87.
 - 40) SSM調査のデータからは、1950年代以降基礎財の階層間の平等化は進んだが、上級財は必ずしもそうでないことが見て取れる。原・盛山, 前掲, pp.14-24.
 - 41) 例えば、戦後の新中間層は他階層からの流入者を受け入れて拡大しつつも、世代間継承性は戦前と大きな変化はなく、いわば「閉鎖的な中流階級」が形成されてきたとさえ指摘される。佐藤俊樹・石原英樹「市民社会の未来と階層階級の現在—「中」社会の終焉から—」(高坂編, 前掲) pp.204-207.